核を撮る

あるフォト・ジャーナリストの旅日記

豊崎博光

無明舎出版

核を撮る

豊崎博光

無明舎出版

著者略歴

豊崎博光（とよさき　ひろみつ）
フリーランス・フォト・ジャーナリスト

1948年（昭和23年）１月　横浜生まれ。
　返還前の沖縄、在日韓国人、朝鮮人を取材後、アメリカ・インディアンを取材(1973年)。1978年から、アメリカの核実験場とされたマーシャル諸島のビキニやエニウエトク環礁、核実験の死の灰をあびせられたロンゲラップ島の住民などの取材をはじめ、以後、世界各国の核実験場、ウラン鉱石採掘場、原子力発電所などとその周辺の被曝者、反核・反原発運動を取材する。
著書に
『アメリカ・インディアン』（写真集。自費出版。1974年）
『核よ驕るなかれ』（講談社。1982年）
『グッドバイ・ロッゲラップ』（写真集。築地書館。1986年）
がある。

発行日　1993年１月15日第１刷
定　価　2,000円
著　者　豊崎博光
発行者　安倍　甲
発行所　無明舎出版
秋田市広面字川崎122－１
電話(0188)32－5680
FAX (0188)32－5137
印刷所　藤庄印刷株式会社
製本所　新日本紙工株式会社

※万一落丁、乱丁の場合はお取り替えいたします。

核を撮る　目次

グレンからの手紙 7
スローキルかサドンデスか 28
五年目のチェルノブイリ 42
マーシャル諸島取材日記 59
大阪、広島、長崎の旅 81
世界の核被害者たちと 93

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

白ロシア共和国の日々 108
日常生活の中から 126
ゆっくり資料整理でもしようか 138
ずいぶん放射線を浴びているなァ 151
二ヵ月以上写真を撮っていない 169
フォト・ジャーナリストの仕事 184

英語、ワープロ、写真展 203
写真をどう読むか 215
ツンドラ地帯を歩く 229
カメラが少し重くなってきた 249
あとがき 264

核を撮る——あるフォト・ジャーナリストの旅日記

グレンからの手紙

日記を書くことになった。日記を書くのは小学生の時、担任の先生に強制されていやいや書いて以来である。元来がずぼらな性格で、取材で外に出かけても日記は書かず、取材メモをとることしかしない。評論家の故大宅壮一氏はかつて、「カメラは万年筆である」としてカメラでメモを撮り日記をまとめたことがあるが、私は日記にするほど写真も撮らない。ともかく、「核を撮る」という日記を書くことになった。日記とよべるかどうかはわからないが、ある日ある時の出来事にそれまでの体験を肉付けして書くことにする。

二月×日

太平洋中西部にあるマーシャル諸島に行っている親友のグレン・アルカレイから、手紙がファックスで送られてきた。私が初めてマーシャル諸島を訪れた一九七八年当時、日本との連絡は電報と無線電話で、電報は届かず、無線電話はほとんど通じなかったのだから、ファックスが送られてくるなんて夢のようだ。一九八〇年に、太平洋上に通信衛星が打ち上げられたからである。

手紙には、二月中に本当にマーシャル諸島に来るのか、来る時にはマーシャル諸島の被曝者のために役立てたいので広島と長崎の被爆者について書かれた資料を持ってきてくれ、マーシャル諸島の人びとの健康調査で五月まで滞在すると書かれていた。昨年のクリスマスカードに、私が二月頃には行きたいと書いたからである。

グレンはニューヨーク市に住む医療人類学者。いつ、どんな病気になったかを聞きだすことで、その本人、家族、その人の属する共同体と地域がどんな精神的、社会的影響をうけたのかを調査、研究している。とくに彼は、放射線被曝による疾病とそれによる精神的、社会的影響を調べている。

グレンは、マーシャル諸島に昨年の九月から滞在している。マーシャル諸島のビキニとエニウエトク環礁では、アメリカが一九四六年から五八年まで六六回の原水爆実験を行ない、周辺の島々の多くの住民に死の灰による被害を与えた。グレンは中心のマジュロ島に仮住まいをし、死の灰をあびた離島に出かけていって、主に女性から、甲状腺障害やがんなどの病気の有無、妊娠と出産の回数、死・流産の経験、生まれた子どもに健康障害があるかなどを聞いているという。マーシャル諸島は母系・女性中心の社会で、女性と子どもの健康問題は重要である。彼はこの調査で、核実験がマーシャル諸島の社会全体にどんな影響を与えているのかを明らかにしたいとしている。グレンはかつて、核実験の死の灰をあびた島のひとつであるウトリック島に平和部隊員として二年間滞在した経験があり、マーシャル語はペラペラで、住民の暮らしぶりや習慣は良く知っている。恥ずかしがり屋のマーシャル諸島の女性たちから、どんな方法で病気や妊娠、出産のことな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

どを聞いているのか興味深い。

彼と初めて会ったのは、一九八五年、ウトリック島と同じように核実験の死の灰をあびたロンゲラップ島を取材している時だった。その後はニューヨーク市で開かれた「第一回核被害者世界大会」（一九八七年）や、「第三回国連軍縮総会」（一九八八年）などで出会った。いっそう親交を深めたのは、昨年三月、彼が講演と調査を兼ねて来日した時である。私は彼のガイド兼通訳として、東京、静岡県焼津市、大阪、高知県土佐清水市、広島、長崎を約二週間共にした。その間、マーシャル諸島での互いの体験などを話し合っているうちにすっかり意気投合し、親友となった。

医療人類学者としての彼の調査ぶりを知ったのは、土佐清水市で、アメリカのマーシャル諸島での核実験の死の灰によって亡くなったと思われる元マグロ漁船員の未亡人をインタビューした時である。亡くなった夫の病歴、操業場所と日時、帰宅した時の健康状態、子どもの健康状態、夫が亡くなった時の夫人の気持ちなど、彼の質問は詳細だった。最後に彼は、「あなたはまだ若い上に一人だ。現在はどのような性生活をしていますか」と聞いた。私は質問の内容に驚き、「初めて会った人にそんなことは聞けない。日本では、女性にそうした質問はしないものなんだ」と彼にいった。

グレンは、「彼女の夫が本当に死の灰の影響で死んだのならば、彼女も夫を亡くしたことで影響（被害）をうけたことになる。その彼女が、現在、精神的に肉体的にどんな影響をうけているかを聞くことは重要だ」と。私は「聞きにくい」といい、彼は「聞いてくれ」といいはった。私はグレンとの会話は英語でやっているので、彼女には内容はわからない。彼女は私たちの押し問答

をぽかんとした様子で見ていた。結局、私はストレートに質問せず、「一人では暮らしは大変でしょう」とあたり障りのない質問をした。「子どもを育てるので精一杯です」と彼女は答え、グレンにもそのように通訳した。

終わってから宿に帰り、夜、酒を飲みながら二人で再びこの話をした。グレンは、アメリカでは核実験などに参加した兵士の夫が後にがんなどで亡くなり、残された夫人が多くいる。彼女たちのなかにはすぐに再婚した者が多い。「一人暮らしは寂しいし、性的欲求は自然のものだからね」とグレンはいった。確かにアメリカの被曝者のなかには〝アトミック・ウィドゥ〟（「被曝者未亡人」とでも訳したらよいのか）と呼ばれる人びとがいる。

かつて私もそうした女性たちを取材したことがある。しかし私は、〝アトミック・ウィドゥ〟が抱えている問題は、夫を亡くしたことによる経済的問題だけと思っていて、性的欲求など心理的な問題については考えも及ばなかった。「被曝の影響はその本人だけではなく、夫人や家族にまで影響を及ぼすんだ。だから私は彼女の心理的な悩みが知りたくて、あのような質問をしたんだ」とグレンはいった。グレンのいう通りだ。しかし私は、被曝者の未亡人に会った時にグレンが聞いたような質問はできないだろうなと思った。

手紙によれば、グレンは、離島にわたり、家から家を訪ねてはインタビューをしているという。時間がかかる調査だ。私の取材経験では、まず家族構成を知ることが大変だ。マーシャル諸島の女性は一六歳位から子どもを産み、平均して一〇人位の子どもを持つ。その子どもたちすべてが一人の男性との間で生まれたとは限らない。

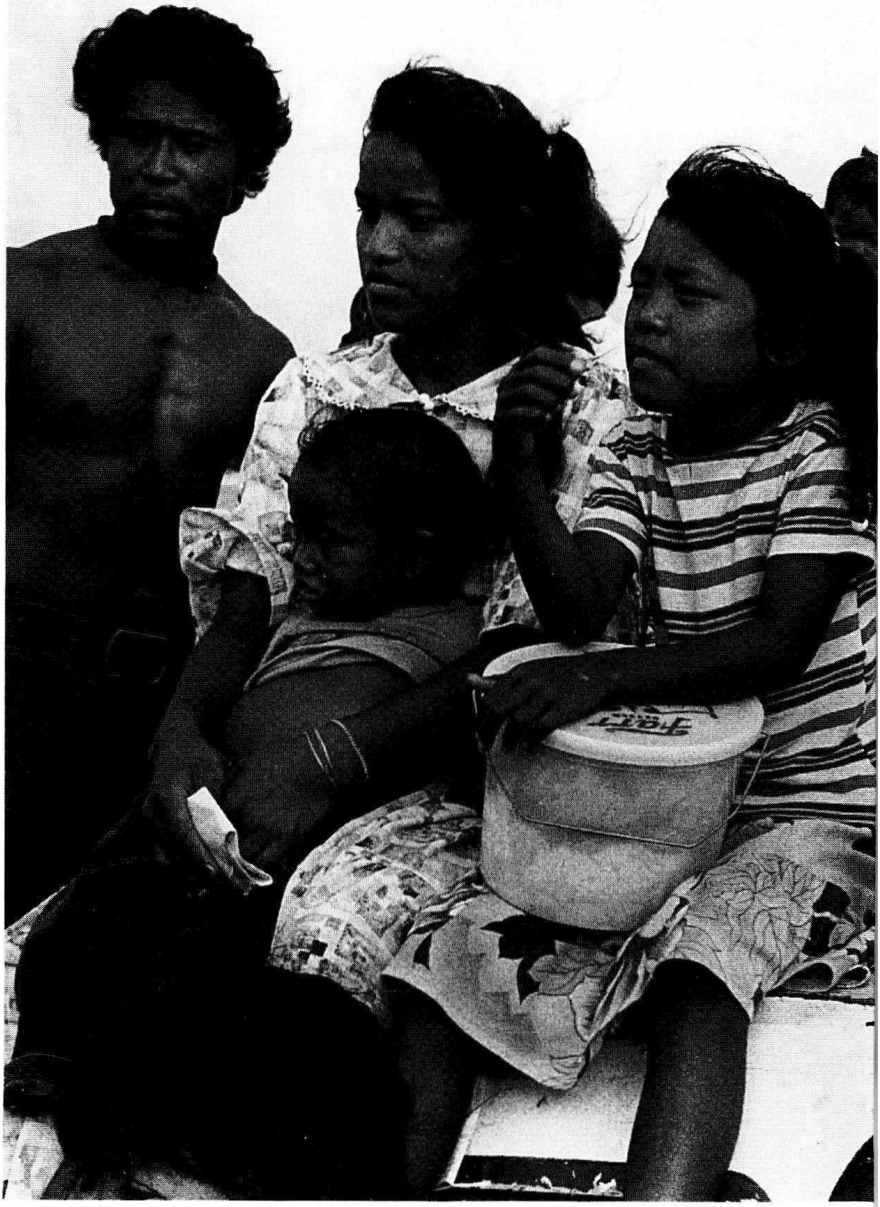
万事おおらかなマーシャルの人びとにとってこれは普通のことである。このため家系は複雑である。次に、病気になったのがいつかという「何時」がわかりにくい。マーシャル諸島の人びとの暮らしに時刻はなく、日の出と日没、干潮と満潮だけが時刻といっても過言ではないほどで、一日はいつも同じである。太平洋戦争後、アメリカが統治する国連信託統治領となったためにキリスト教の影響が強くなり、復活祭（四月）とクリスマス（十二月）ぐらいが一年の内の区切りである。こうした状況の下で、人びとが病気になったのは何年何月かを知ることは至難の技だ。グレンのことだから上手くやっているのだろうが。

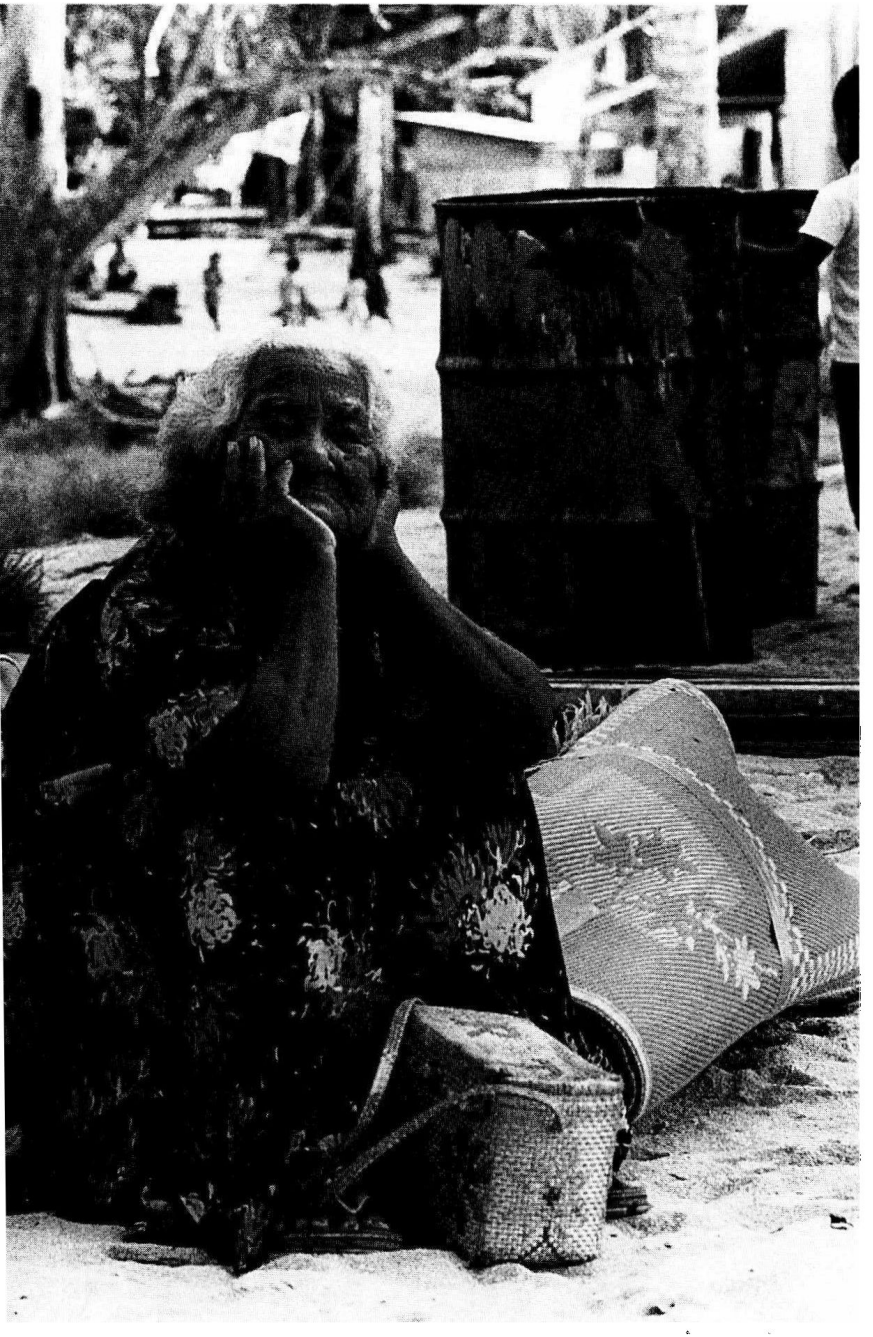
グレンからの手紙を見ているうちに、マーシャル諸島のあい色の海、海抜二メートルもない低平な白い珊瑚礁の島、風にゆれるヤシの木、そして灼けつくような陽光などを思いだした。そういえば、最近、体に潮気がない。一九七八年から八七年まではほぼ毎年マーシャル諸島に出かけていたが、この四年間はまったく行っていない。

マーシャル諸島に行きたい！

私は、すぐには行けないが、五月中旬には何があってもマーシャル諸島に行く、その時に広島、長崎の被爆者の資料を持って行くとの手紙を書き、グレンのマジュロ島の連絡先にファックスで送った。しかし連絡先のファックスの調子が悪いのかつながらず、同島にある週刊新聞『マーシャル・アイランズ・ジャーナル』紙の編集部にいる日本人写真家の島田興生さん宛てにファックスを送り、グレンへの転送を頼んだ。

島を出るロンゲラップ島の人びと





島を出るロンゲラップ島の被曝者セーラ・ネプタリさん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com